

1973年春の時点におけるジョージ・ハリソンの最新蓄音盤は、新作の作品に限って述べるならば、1971年7月に発売されたシングル〔Bangla Desh〕だった。この二年近い空白の原因は、実質二枚組の ALL THINGS MUST PASS でアイデアを出し尽くしてしまったこと、バングラデシュ難民救済コンサートの主催で疲れてしまったこと、そのコンサートの収支や実況録音盤発売に関して挫折感を味わったこと、などが推測できる。しかしハリソンは立ちあがる。1973年5月、ファン待望の新作が発表された。〔Give Me Love〕と〔Miss O'Dell〕のカップリングである。

〔H-026〕 **GIVE ME LOVE** (Give Me Peace On Earth)

自叙伝 I ME MINE (1980 年 Simon and Schuster 刊) の中で、ハリソンは次のように記している: This song is a prayer and personal statement between me, the Lord, and whoever likes it. (これは祈りの歌で、神に対して、そして誰であれこの歌を気に入ってくれる人に対して、個人的に語り掛けるもの)。

歌詞は概して明解だが、一つだけ分かり難いラインがある。それは *Keep me free from birth*。LIVING IN THE MATERIAL WORLD (TOCP-65542) 付属の解説リーフレット (落流鳥対訳) では、続く *Give me hope* と合わせて、『私に生きる由を そう希望をお与えください』という対訳が施されているが、これは適訳とは思えない。LIVING IN THE MATERIAL WORLD (TOCP-70072) (奥田祐士対訳) の『生まれから自由にしてください』は逐語訳の域を出ておらず、具体的な意味が表れていない。また、BEST OF GEORGE HARRISON (TOCP-6955) (西川めぐみ対訳) の『素性から救ってください』は、生まれた境遇を嘆いているようで、的を射ていないと思われる。

私の解釈によると、この birth は reincarnation (輪廻) のこと。噛み砕いた言葉で言うと、rebirth by karma (業による生まれ変わり) である。ハリソンは〔Art Of Dying〕で語ったヒンドゥー教の思想に言及しているのだ。よって、*Keep me free from birth* の和訳は、「輪廻から解放されるようにしてください」のようになる。

My Lord の前に聞こえる Om は、ヒンドゥー教の祈禱語。

〔H-028〕 **SUE ME, SUE YOU BLUES**

I wrote it during the big suing period（訴訟で大もめしていた時期に書いた）という I ME MINE における注釈、著作権登録が 1971 年になされていること、そして *Now all that's left is to find yourself a new band.*（あとは君が新しいバンドを見つけるだけだ）というラインから、ポール・マッカートニーへ向けて歌ったものであることが分かる。歌のテーマは離婚訴訟などではない。

よって、出だしを『お前は俺の 俺はお前の将来を考えてのこと 配偶者への知らせは？』と対訳した LITMW（TOCP-65542）付属の解説リーフレット（落流鳥対訳）は間違いである。また、LITMW（TOCP-70072）のリーフレット（奥田祐士対訳）が *Swing your partners. All get screwed.* を『パートナーたちを振り回せ、みんなコケにされちまえ』と解釈していることにも異議を唱えたい。この *partners* は「共同出資者たち」という意味のはずである。つまり、ハリソンから見たマッカートニーの事業パートナーは、ハリソン自身とレノンとスターキーのことになる。私の結論を述べると、*You serve me, and I'll serve you. Swing your partners. All get screwed.* の正訳見本は、「君が僕を訴えるなら、僕も君を訴えてやる。でも、パートナーを振り回して何になるんだ？ 僕たちみんなが痛手を受けるだけだよ」のようなものであろう。

2 番へ進むと、前述のように、歌の具体的な背景が明らかになる。ハリソンとマッカートニーが共演に向かっているのは、もはやロックンロールではなくて、*the sue-me-sue-you blues*（訴訟合戦というブルーズ）。

3 番の *Hold the block on money flow. Now move it into joint escrow.* は、アレン・クラインの魔の手から逃れたいと考えていたマッカートニーの主張を引用したものではないだろうか。このように考えると、私は『第三者委託に移してしまえ』という TOCP-70072 の対訳には同意できない。この二つのラインは「金の流れを止めるだと？ 金を共同で第三者預託に移すだと？」という意味だと思う。

続く *Court receiver, laughs, and thrills* を『管財人も笑っていつかお楽しみだ』や『管財人は高笑いして胸震い』とする対訳にも、納得できない。これでは筋の通った意味にならない。私の解釈では、「収益管理人を使うだと？ 笑い種だよ。馬鹿げ

〔H-032〕 **LIVING IN THE MATERIAL WORLD**

ハリソンの宗教観がユーモアを交えて語られる。

洒落として傑作なのが 3 番の *Met ... John and Paul here in the material world.* (ジョンとポールとも、ここ物質界で出会った) に続くライン。TOCP-65542 の解説リーフレットは、バンド解散後もリンゴは個々のソロ活動に参加しているというような対訳を載せているが、これは誤訳である。 *Though we started out quite poor, we got Richie on a tour.* (始めは惨めだったが、巡業でリッチーを獲得した) はダブル・ミーニング。このように表記すると、poor は「精彩がない」ことと解釈することになり、1960 年秋にハンブルグで知り合ったリンゴ (本名 Richard) を、1962 年夏にバンドのメンバーとして迎えたことを述べていることになる。他方、Richie の部分を rich(ie)と書くと、poor は「金がない」ことを意味することになり、巡業に出て裕福な身分になったと読める。いずれにしても、そのような状況の虜になったと言うのが *Got caught up in the material world.* である。

若かりし頃の友情やバンド活動を回想するのが *such sweet memories have I* (そんな良い思い出がある) と考えられるが、その前の *From the spiritual sky* との関連が私には分からない。この副詞句は「精神的な観点から見ると」と読んでよいのだろうか？ それとも「天が与えてくれた」だろうか？

ミドルの後の 4 番では、*Get frustrated in the material world. Senses never gratified. Only swelling like a tide* の部分を正確に理解するのが難しい。私は、正気が通じないためにフラストレーションが溜まると嘆いているのではないかと思うのだが。

歌詞を丁寧に読もうとすると、5 番の *Not much giving in the material world* も明解ではない。直前の *While I'm living in the material world* の主語に注目するなら、ハリソン自身が人に施しをすることが少ないと解釈できる。だが、I ME MINE に掲載されている手書き原稿では *there's not much giving in the material world* (物質界では人に施しをすることがあまりない) となっている。レコードではこの *there's* は聞こえないが、普遍性を述べているのかもしれない。どちらであっても、*Got a lot of work to do Try to get a message through* は、「自分が言いたい思想

3 番の *So long. Bye-bye.* の後も、私の聴き取りは歌詞リーフレットの『It was fun by the matter』とは異なる。ここは *It was fun while it mattered.* のはず。敢えて直訳すると、「意義があることだと思っていた時は楽しいことだった」。やはりビートルズのことと推察できる。

エンディングは *Hey, yeah, yeah, yes, I lie around all over the place …* でよいだろう。

〔S-006/H-038〕 **PHOTOGRAPH**

〔Back Off Boogaloo〕から1年半。米国では1973年9月、英国では10月、リノ・スター4枚目のシングルが発売された。A面のキャッチーな旋律、シンプルながら情のある歌詞、口ずさみやすさが大衆に受けて、米国ではチャートの首位まで上昇した。このナンバーは、CDアルバム RINGO に加えて、いわゆるベスト編集盤の BLAST FROM YOUR PAST および PHOTOGRAPH: THE VERY BEST OF RINGO でも聴くことができる。録音は発表半年前の1973年3月。

上述のように、スターとジョージ・ハリソン共作の歌詞は明解で、ほとんど説明を要しないだろう。しかし、CP32-5462 および TOCP-70310 の歌詞リーフレット（吉成伸幸 対訳）に見過ごせない訳文があるので、指摘しておく。*I can't get used to living here.* を『ここには住みなれそうもない』と訳すと、新しい家や土地のことを問題にしているような印象を受けてしまう。この *here* は状況のことを言うもので、「このように」という意味。私が全文を訳すと、「こんな生活に慣れるなんて無理だ」のようになる。恋人または妻に出て行かれて、独りになったことを言っている。

ハリソンが弾く12弦ギター、そして彼が付けるハーモニーも聴きどころ。ビートルズ時代は中音を持ち場だったが、このレコードではスターの上を歌っている。

〔L-040〕 **MIND GAMES**

アルバム MIND GAMES のオープニング・ナンバーだが、英米ともにシングル盤にもなった。米国におけるシングル盤発売は、アルバムに先んじた 1973 年 10 月末。題名は、米国の心理学者夫婦 Robert Masters & Jean Houston が前年に出版した精神訓練のガイド本 MIND GAMES から借用したと言われている。

歌詞は抽象的、比喩的で、解り難い。まず *playing those mind games*（心理戦術をとる）だが、肯定的、進歩的、平和的な思考をすることを言っている。これによって平和に対する障壁を押し崩し、平和の種をまく（*pushing the barriers, planting seeds*）という考え。

物理的に急進的な立場を取らないことに言及しているのが、*playing / doing the mind guerrilla*（精神的な遊撃を行う）および *chanting the mantra "Peace on earth"*（‘世界に平和を’という題目を唱える）。あくまで心の中で反戦運動を行うことを提唱している。

2 番では、たとえ御伽話のような空想論にすぎないと思われても、実現のための運動を続ける、と述べているようだ。*Some kind of druid dudes lifting the veil*（ドルイドのような人たちがヴェールを上げるように）は、古代ケルトの神話に登場する不思議な力に喩えているのではないだろうか。また、*the search for the grail*（理想の探究）は、アーサー王伝説における聖杯（the Grail）の探索に掛けている。

ミドルシクスティーンへ進むと、*Love is the answer*（愛があれば解決する）というラインが〔The Word〕や〔All You Need Is Love〕を思い出させる。他方、*Love is a flower you got to let it grow*（愛を花のように育てよう）は、レノンとしては初めての比喩。

3 番後半の *You just can't beat on those mind guerrillas* は、好戦的な体制に対しての、もしくは中立的な立場を取っている人に対しての、声明と解釈してよいだろうか？ そうであれば、「心の中でゲリラ活動を行う人々を潰そうたって、できないことだよ」と訳すことができる。

〔M-068〕 **BAND ON THE RUN**

三つの曲が滑らかにつながるメドレーのような印象を受ける。ABBEY ROAD の B 面と RED ROSE SPEEDWAY の終盤を想起させるが、歌詞には連続性がある。その内容は現実を基にしたであろう空想。マッカートニーのスタイルと言える。

歌詞はほぼ単純明解。SO/09/0225/TOCP-7855/TOCP-3128/TOCP-65504 の解説書（落流鳥対訳）を参考にすれば容易に分かるはずだ。外の世界へ戻りたい囚人数名が豪雨の中を脱獄するというストーリー。空想の話だが、当時のマッカートニーの心境が含まれているかもしれない。つまり、ビートルズという檻ないし枠からの解放である。

この件について簡潔に説明しておこう。マッカートニーはビートルズという事業組織を法的に清算しようとして、1970 年 12 月に残りのメンバー三人を相手に訴訟を起こしていた。その三人がアレン・クラインと結んでいたマネジメント契約を更新しなかったのが 1973 年 3 月。ということは、このレコードを録音した頃（73 年 8 月～9 月）には、マッカートニーは自由が近づいていることを樂觀視していたはずである。ビートルズの正式な解散は 1975 年 1 月だった。

題名について、マッカートニーは 1999 年に発売された二枚組 BAND ON THE RUN 25th Anniversary Edition の中で次のように語っている： I thought [中略] It will be a great album title. It will be nice for us if we were getting on a tour. We can be the band on the run, 'cause it doesn't always mean "on the run from law." "On the run" to me is just like a band on the road. （思ったのは、アルバムの題名として好いこと。このバンドでツアーができれば素晴らしいし、そうなれば、まさにバンドとして動き回ることができる。この言葉は法律から逃走することだけを言うんじゃない。僕にとっての on the run は巡業に出るということ）。

なお、ラゴスへ同行した録音技師ジェフ・エメリック（Geoff Emerick）は、著書 HERE, THERE AND EVERYWHERE（2006 年 Gotham Books 刊）の中で次のように書いている： Although it undoubtedly inspired the title track, Paul and Linda never talked much about the musicians who had quit on the eve of the sessions. （直前にメンバー二人がバンドから脱退したことが着想になったことは確

〔L-059〕 #9 DREAM

レノンが見た夢の回想。9 はレノンが縁起が良いと思っていた数字である。

分かりやすい歌詞なのだが、CD に付属する対訳に問題がある。 *Thru the heat whispered trees* は『熱っぽく囁きかける木々を抜けて』という意味ではない。レノンが散歩していたのは市街地の通り。そして過去形 *whispered* は、当然ながら現在分詞 *whispering* とは違う。このラインの意味は「暑さを通して木々がささやいた ⇒ 街路樹のささやきが暑い空気を通して聞こえた」。 *Trees whispered through the heat.* という文章の副詞句が頭に出たことによる倒置形である。

Somebody called out my name as it started to rain. の背後でレノンの名を呼ぶのは、長年レノンと小野洋子のパーソナル・アシスタントを務め、当時はレノンのパートナーだったメイ・パン (May Pang) 。

彼女の声は 2 番の *Something warm, sudden cold.* の前後でも聞こえる。声が左右のチャンネルに飛びせいもあって、私には *rish* という音しか確認できなかったが、JOHN LENNON – THE STORIES BEHIND EVERY SONG 1970-1980 によると *Hare Krishna, George.* と言っているとか。

1 番の末尾に戻ると、最後のラインは *Two spirits dancing so strange* 。これは妖精だろうか？ それとも人間？ 人間の女性だとすると、レノンの亡くなった母ジュリアと小野洋子だろうか？ そうでなければ、小野洋子とメイ・パン？

2 番。 *Thru the mirror go round, round* には主語がない。この部分は *I thought I could feel [magic] on a river of sound, through the mirror-go-round.* (心地好い音の流れに乗って、回転する鏡を通して、[魔法が] 感じられると思った) と読むのではないだろうか？

Ah! böwakawa poussé, poussé は夢の中で聞いた呪文のような言葉。意味はないと言う。

この曲はアルバム発表のおよそ三ヵ月後に米英でシングル盤としても発売された (B 面は〔L-056〕)。歌詞に合ったドリーミーなサウンドが好評で、米国ではヒッ

〔L-061〕 **STEEL AND GLASS**

このナンバーも、題名からすぐに内容を察することができる。非情なほどの頑固さを持った者と傷つきやすい心を持った者との対比、もしくは強さともろさの両面を持った者。レノン自身が書いて歌ったのだから、後者の内容の自己描写だろうと私は思う。

ところが、WALLS AND BRIDGES (CP32-5465) の解説書には『アラン・クラインを皮肉ったものと言われています』と書いてある。同 (TOCP-67778 / TOCP-70905) では『アラン・クラインにあてつけた曲』と言い切っている。事実、JOHN LENNON – THE STORIES BEHIND EVERY SONG 1970-1980 (Paul Du Noyer 著) や LENNON AND McCARTNEY: TOGETHER ALONE (John Blaney 著) は、その可能性が高いことを示唆している。同時に、前者は [Lennon] denied that either song was directed at a single individual. (レノンは特定の個人に向けて言ったという推測を否定した) と述べ、後者は But it really isn't about anybody. I loathe to tell you this, because it spoils the fun. (誰のことというんじゃないよ。こうやってしまうと、誰のことだろう? と推理する面白さがなくなってしまうけどね) というレノンの発言を引用している。また、興味深いことに、レノンとアレン・クラインの友人関係はこのアルバムの発売後も続いていた。レノンとパンがクラインの借家 (ロングアイランド東部) を一週間また借りしたことがあったと、パンが著書 INSTAMATIC KARMA: PHOTOGRAPHS OF JOHN LENNON に書いている。1975 年 1 月だったとか。

演奏が始まる前にレノンが This is a story about your friend and mine. と言い、誰かが Who is it, who is it? Who is it? と呼応する。第三者のことと早合点してはならない。私たちリスナーとレノンとに共通する友人などいるだろうか?

1 番の *There you stand with your L.A. tan and your New York walk and your New York talk.* は、まさにロサンゼルスからニューヨークへ戻ったレノンに当てはまる。主語が I でないことを指摘する読者がいるかもしれない。しかし、レノンが自身を you で指すことは、〔Good Morning, Good Morning〕以降めずらしいことではない。つい最近の〔L-058〕では I と you が混在していた。他方、この文の内容はクラインにも合致するだろうか? 私が読み聞きしたところによると、クライ

〔L-063〕 **NOBODY LOVES YOU** (WHEN YOU'RE DOWN AND OUT)

自己満足的な冗談のように付加されている〔Ya Ya〕を除くと、これがアルバム WALLS AND BRIDGES の最後のトラック。そして取りをとるのに相応しい秀作になっている。書いたのはロサンゼルスへ移ってからほどなくしてだった。

JOHN LENNON – THE STORIES BEHIND EVERY SONG 1970-1980 によると、題名は〔Nobody Knows You When You're Down And Out〕というブルーズのスタンダード曲から取ったもの。レノンがこのナンバーを知ったのは、1970 年にエリック・クラプトン (Eric Clapton) がカバーしたことによると推測されている。

出だしの *Nobody loves you when you're down and out.* には、歌を書いた頃のレノンの思いが表れている。米国の永住権は否定され、アルバム SOME TIME IN NEW YORK CITY は酷評され、MIND GAMES の評判もかんばしくなく、小野洋子に追い出され、打ちのめされた心境だったはずだ。

そのラインを皮肉るのが *Nobody sees you when you're on cloud nine.* (意気揚々としている時だって、気付いてもらえないけれど)。cloud nine は「最上層部の雲の上にいる ⇒ 有頂天になって」という意味である。

Everybody's hustling for a buck and a dime. (誰しも 1 ドルでも 10 セントでも得ようと精を出す) は、カジノの光景から浮かんだラインではないだろうか。と言うのは、INSTAMATIC KARMA におけるパンの回想によると、レノンがこの歌を書いたのはラスベガス滞在中だったからだ。1973 年 10 月とのこと。

すると、続く *I'll scratch your back and you scratch mine.* (君を手伝ってやるから、君も僕を手伝ってくれ／君を誉めてやるから、君も僕を誉めてくれ) にはスクラッチ・カードをこすることがかけてあるかもしれない。

I've been across to the other side. I've shown you everything. I got nothing to hide. (今とは反対の立場にいたこともある。君たちにすべて見せてやった。隠すものは何もない) は、ビートルズ時代の栄光と活動、そしてレノンの開放性のことではないだろうか。そうだとすると、*And still you ask me, do I love you, what it is, what it is.* (それなのに、君たちは、僕は君たちを大切にしないのか? とか、ど

LENNON AND McARTNEY: TOGETHER ALONE によると、ポール・マッカートニーがボブ・ディランの〔Maggie's Farm〕からインスピレーションを受けて書いた作品。ディランは I ain't gonna work on Maggie's farm no more (© 1965 Warner Bros) と思って、農場から去ったのだが、マッカートニーは逆に、*Let's go down to Junior's farm* と、農場へ向かって行くことを歌っている。農場主の名 Junior は前述のパットマンの本名に由来する。

ミドルエイトで *Let's go down to Junior's farm* に続く部分だが、WINGS GREATEST (TOCP-7859) と PAUL McARTNEY (TOCP-51055) のブックレット (どちらも山本安見訳詞) の記述は正確だろうか？ 私は、『where I will lay low No life high life のんびりと横になって暮らすんだ 上流社会の生活にはオサラバさ』ではなく、where I wanna lay low. Low life, high life. (そこで横になりたい。下層階級の暮らしに見えるけど、それこそ優雅な暮らしなんだ) だと思う。この lay low (標準英語では lie low) には「時機を待つ」という意味も含まれているかもしれない。

歌詞の他の部分は農場生活とは無関係。マッカートニーが思い付いた語呂の好い短文で構成する無駄話のようだ。以前から温めていたものかもしれない。

1 番は *You should have seen me with the poker man.* で始まる。次の *I had a honey, and I bet a grand.* の前半を『ハチミツを持っていたので』とした訳詞は誤訳。蜂蜜ならば不可算名詞である。この a honey は「素的な人」という意味。ちなみに、米国製シングル盤のスリーブ写真において、リンダがこの女に扮していた。ポールは農夫、ブリットンはお poker のディーラー、レインはエスキモー (カナダにおける正式名はイヌイット) の出で立ち。マッカロックは立派なみなりでギャンブルに興じていた。

そして、『Just to take the time out licking his hand』という聴き取りも間違い。正しくは Just in the nick of time, I looked at his hand. (間一髪で彼の手の内を見た)。私の読みは次のようだ。恋人を同伴した話者は、彼女にいいところを見せようとして、千ドルを賭ける。ところが、ディーラーの持ち札を (盗み) 見て、すんでのところで賭け金を減らしたか取り下げた。

〔L-064〕 **GOODNIGHT VIENNA**

正式な題名は (IT'S ALL DOWN TO) GOODNIGHT VIENNA。レノンがスターのために書いたナンバーで、ピアノの演奏とイントロにおけるカウントもレノンによるもの。二回ある *Get it up!* の部分も彼の声のように聞こえる。また、このアルバムを宣伝するための TV コマーシャルでは、スターを先導し、より多く話した。

I took my baby to a party last night. という出だしから、歌の方向性を予測できるリスナーもいるかもしれない。*She was so beautiful she made me uptight.* の *uptight* は「緊張した」とも「完璧な」とも解釈できる。

その次のラインは、GOODNIGHT VIENNA (TOCP-7508) に付属するブックレット (山本安見対訳) によると『Up come a butcher with her ju jus alright とところがあの娘は肉屋のヤツといちゃつくばかり』。しかし、私は Up come a butcher with her jujus alright. (肉の解体屋が、火を付けた彼女のマリファナ・タバコを持って現れる) だと思う。この文だけ現在時制になっている理由は不明。

It's all down to Goodnight Vienna. を説明しておく。be down to は「～だけになってしまった」。Goodnight Vienna は英国またはリヴァプールの俗語で、It's all over. (すっかり終わった) とか Let's get out of here. (ずらかろうぜ) という意味らしい。私はこの歌以外で聞いたことがない。

2 番の二番目のラインについても、上述のブックレットの表記と対訳は疑問だ。『Green as a frog, man I was back into school カエルみたいにまっ青になって、僕は学校に戻った』ではなくて、Green as a frogman, I was back into school. (潜水夫のように青ざめて、僕は仲間の輪の中に戻った) であろう。

なぜかブックレットには 4 番の歌詞が載っていない。私には次のように聞こえる：I took my baby to a party last night, uh-huh-huh. She was so beautiful she made me uptight, uh-huh-huh. Up came a butcher with his needles in sight, uh-huh-huh. (肉の解体屋が、注射器を持って現れた)。

この曲は米国では 1975 年 6 月にシングル盤にもなったが、たいしてヒットしなかった。アルバム発売から既に半年以上が経っていて、話題性についての賞味期限

〔M-083〕 **VENUS AND MARS**

アルバム VENUS AND MARS のオープニング曲。競技場の観覧席に座ってコンサートが始まるのを待つファンの視点で歌っている。斬新な発想だ。

A good friend of mine follows the stars. は三通りに読める。ひとつは「親友の一人がこのスターたちを追いつけている」。もうひとつは「親友の一人が星占いを信奉している」。そして「親友の一人が星を追跡して（観測して）いる」。TOCP-3129のブックレット（山本安見対訳）が言う『僕の大好きな友だちが星々の輝きに誘われて…』ははなはだ疑問だ。

この読み方によって *Venus and Mars are alright tonight.* の解釈も異なるものになる。Venus と Mars を夫婦または恋愛関係にある音楽家カップルのニックネームと考えると、「ヴィーナスとマーズは今夜も好調」。星占いの観点に立つと、「金星と火星の位置関係が今夜は良い」。そして天体観測ならば、「金星と火星が今夜は良く見える」のような訳になろう。

〔M-084〕 **ROCK SHOW**

コンサートの幕が開く。〔Sgt. Pepper's Lonely Hearts Club Band〕ではステージ上のバンドが観客への挨拶を歌で行ったが、マッカートニーは同じことを繰り返さない。今回は、ミュージシャン（they）の観覧者（I）が同行者（you）に話す言葉が歌詞になっている。

He looks a lot like a guy I knew way back when. にある way back when は、「以前」という意味。*Silly Willy with the Philly Band* は 架空の歌手とバンド。ウィリーが手に何を持っているかは明らかでない。

2 番。 *It looks a lot like the one used by Jimmy Page.* （ジミー・ペイジが使ったものとよく似ている）から、 *Tell me, what's that man moving cross the stage?* はギターのことを言っていることが分かる。 *moving cross the stage* （ステージと交差する方向にギターを動かしている）は、抱えているギターを観衆の方へ押ししたり自分の体の方へ引いたりする動作の繰り返しと思われる。

〔M-092〕 LISTEN TO WHAT THE MAN SAID

演奏が始まる前に台詞が入る。私の耳には All right, OK. Ha, ha, ha. Very good to see you down in New Orleans, man. Yeah, hairy. Yeah, yeah. と聞こえる。マッカートニーがニューオーリーズ現地人のアクセントを真似て挨拶する相手は誰か？ リスナー？ それとも自分自身？ 私は、彼はジョン・レノンをこのように迎えたかったのではないかと思う。

一聴すると、マッカートニーによるラブソングの典型。歌詞は肯定的、楽天的。旋律は甘く、演奏も軽やかで明るい。当然のように、英米ともにアルバム VENUS AND MARS の先行シングル盤として発表された。米国ではチャート・トッパー。

ありきたりの単語を用いた簡単な歌詞のように聞こえるが、それは前半のこと。Oh, yes, indeed で始まる部分は、決して単純明解ではない。まず、*And love is fine for all we know for all we know, our love will grow* をどう解釈するか？ 私は、それぞれ主節の動詞と考えられる二つの動詞 (is と will grow) の時制に注目した上で、*And love is fine for all, we know. For all we know, our love will grow.* と読む。つまり、for all we know を繰り返しているのではないところが、マッカートニーが狙った味噌だと思うのだ。読者に分かりやすいように逐語訳すると、「愛は誰にとっても素晴らしいものだって、僕たちは知っている。もしかしたら、僕たちの愛は発展するかもしれない」というのがこの二つの文の意味ではないだろうか。

謎がもうひとつある。the man とは誰のことだろう？ 前述の *soldier boy* のこととは思えない。*So won't you listen to what the man said?* (だから、あの男が言ったことを聞きいれてくれよ) から、宗教的指導者が思い浮かぶ。しかし、それならば、*So won't you listen to what the man says?* (だから、あの男が言うことに耳を傾けてくれよ) という現在時制の文になるはずだ。マッカートニーが問題にしているのは、誰かの過去の発言である。

That's what the man said. (あの男がそう言った) の直前の文は *our love will grow* だ。マッカートニーに近い人物で、リスナーが知っている人物で、このような発言をした男性は誰か？ 私はジョン・レノンだと思う。マッカートニーが言及したのは、一年半前の〔Mind Games〕の一節 *Love is a flower you got to let it grow.*

〔H-064〕 **THIS SONG**

英国ではアルバム THIRTY-THREE & 1/3 と同日に、米国ではアルバムの九日前に、シングル盤としても発売された。大したヒットにはならなかったが、私はサウンドも歌詞も良く出来ていると思う。そして傑作だったのが、プロモ映像。警察官に法廷へ連行されたハリソンが、この歌は誰の著作権も侵していない、と歌うのだ。〔My Sweet Lord〕訴訟に負けたうっぴん晴らしである。それにしても、ハリソンが言う皮肉は面白い。

This song ain't black or white の black は「非合法の」、white は「罪のない」という意味。歌というものは、盗作でなくても他人の作品に似て聞こえるもの、というのが裁判におけるハリソンの主張だった。

and as far as I know Don't infringe on anyone's copyright, so ... This song we'll let be は、*and as far as I know, it doesn't infringe on anyone's copyright, so we'll let this song be.* のこと。「僕が知る限り、この歌は誰の著作権も侵害していないから、このままでいい」という意味。つまり、作り替える必要がないと言っている。

続く *This song is in E.* は「この歌のキーはE」。仮に『Eで始まる』という意味ならば、*This song begins with E.* と歌ったであろう。

2 番。制作者側が作成した歌詞リーフレットを注意して見る必要がある。最初のラインは *And this tune has nothing 'Bright' about it* となっている。単純に *This tune has nothing bright about it.* (この曲には気の利いたところがあるわけではない) と読んではいけないということだ。「この曲にはブライト的なものはないよ」と読むのである。それは、〔My Sweet Lord〕の著作権侵害を訴えたのが Bright Tunes というレコード制作会社だったからだ。

歌詞リーフレットに *This tune ain't bad or good and come ever what may My expert tells me it's okay As this song came to me Quite unknowingly* と記されている部分は、*This tune ain't bad or good. And come ever what may, my expert tells me it's okay, as this song came to me unknowingly.* と書くと、分かりやすいはず。和訳すると、「この曲は良くも悪くもない。僕が知っている専門家によ